

天台智顗と『金光明經』

一 問題の所在

『金光明經』は、漢譯のほかにはチベット語譯、モンゴル語譯、ソグド語譯、ウイグル語譯など、アジア各國語の翻譯があり、アジア全域に廣く流布した大乘教典である。經はインドにおいて紀元四世紀ころに成立したとされ、その後順次増廣が加えられて現在の形となったというのが通説である。⁽¹⁾經には、佛壽長遠、金光明懺法、四天王による正法王道論と國家鎮護などの説が説かれ、さらに後の増廣部分と目される諸品には、法身・如來藏思想、唯識の三性説も説かれている。

この經について、中國天台では、智顗がその著作中に引用したり、金光明懺法を修したり、また經の疏である『金光明經文句』『金光明經玄義』を製したりしている。そこで、本

論では、智顗が『金光明經』をどのように理解し、受容したか、また經は智顗の思想形成にどのように關つてゐるかという問題について検討を加えたい。

二 範圍と方法

『金光明經』の現存漢譯テキストには三種があり、その第一は曇無讖譯四卷本の『金光明經』である。現存テキストでは分章は十九品となっているが、最終章の囑累品は隋の闍那崛多が譯出したものを後に付加したもので、元來は十八品であった。第二は隋の寶貴が眞諦譯と曇無讖譯とを合糅した『合部金光明經』八卷本である。經の漢譯は曇無讖譯が初譯で、第二譯は眞諦の譯出であるが、これは現存せず、曇無讖譯には存在しなかったところを眞諦譯で補ったとする『合部

藤井教公

『金光明經』によって、現在その一部を知ることができるのである。その補いの部分は『合部金光明經』中の、「三身分別品」第三、「業消滅品」第五、「陀羅尼最淨地品」第六、「依空滿願品」第九で、この四品が眞諦譯である。なお、『合部金光明經』には、闍那崛多譯の「銀主陀羅尼品」第十一が付加されており、全體の分章は二十四品となっている。現存テキストの第三は、唐の義淨譯の『金光明最勝王經』十卷本で、テキストとしてはこれが最も整ったものとなっている。右の三種のうち、智顗が主として依用したものは曇無讖譯で、經の注釋書の『金光明經文句』と一經の玄旨を述べた書の『金光明經玄義』ともこれに依っている。經の引用も曇無讖譯が引かれることがほとんどだが、しかし、『摩訶止觀』中には、曇無讖譯には存在しない「三身分別品」「陀羅尼最淨地品」からも引かれている例があるから、この場合は當時現存していたと思われる眞諦譯を引いたということになる。實際、『金光明經玄義』と『金光明經文句』の中には、「新本云」として眞諦譯が引かれていることがしばしばあり、曇無讖譯と眞諦譯の両者が座右に置かれていたことが知られる。

さて、右に述べたとおり智顗の著作中には、その比較的に

い時期に成立したものの中にも『金光明經』の引用が見られ、また智顗が講説し、門人灌頂が筆録してまとめた經の注釋書である『金光明經文句』と『金光明經玄義』とが存する。したがって、先の問題について検討するにあたって、まず先に『金光明經文句』『金光明經玄義』の二書以外の著作中に引かれる經の引用を調べ、その引用が文脈の上でどのような意味をもっているかを検討することとし、次に『金光明經文句』と『金光明經玄義』の二書に當って、經がどのようにに理解され、受容されているかということを検討しよう。その場合、最初に検討の對象とする智顗の著作、すなわち經の引用が見られる著作については、これを『次第禪門』『小止觀』『摩訶止觀』『維摩經玄疏』の四書に限ることにする。なぜなら、智顗の著作中には、智顗自身の手になる親筆と、智顗が講説し、それを門人が筆録したもの、あるいは智顗自身の作に擬せられつつも實際は後人の述作によるもの、などが混在しているからである。佐藤哲英博士は、智顗の著作について、親撰（智顗自身が筆を執ったもの）、眞説（智顗が講説、門人がそれを筆録したもの）、假托の書（後人の述作が智顗の作に擬せられたもの）の三種類に分類し、さらにそのうちの眞説を、（一）門人が筆録したものを智顗自身が在世中に

監修したもの、(二)筆録本が智顗在世中には未完成で、智顗自身は目を通していないもの、の二種に分けられている。⁽³⁾その區分法と一々の著作についての検討の成果とを踏まえていえば、本稿で検討の對象とする著作の『次第禪門』は眞説の(一)、『小止觀』及び『維摩經玄疏』は親撰、『摩訶止觀』は眞説の(二)に相當する。一方、『金光明經玄義』と『金光明經文句』とは、假托の書の區分に入るが、しかし、この二書については佐藤博士は智顗の講説と灌頂の著作との區別がつがつたい、とされている。⁽³⁾それ故、筆者の立場としては、灌頂を智顗の忠實な祖述者とみなし、『摩訶止觀』の場合と同じく智顗の講説が灌頂によって整理筆録されているもの、すなわちそこには智顗の考えが盛られているものとして扱うことにしたい。『妙法蓮華經文句』や『四念處』中にも『金光明經』の引用が見られるが、これらの書については、灌頂の著作とした方がよいという見解が示されているので、⁽⁴⁾それに従って今は検討の對象には加えない。

なお、近年平井俊榮博士によって、灌頂が智顗の講説の筆録本を修治する場合に、『妙法蓮華經文句』などが吉藏の著作から援用して修治がなされていることが明らかにされているが、『金光明經玄義』『金光明經文句』の二書に關しては、

筆者の以前の検討によって、吉藏の『金光明經疏』との間には援用關係は存在しないことが確認されている。⁽⁵⁾
以上のような範圍と方法とにおいて、以下に具體的な検討に入ろう。

三 『金光明經玄義』『金光明經文句』以外に見 える經の引用について

(一) 『次第禪門』に見える引用

『次第禪門』は、具さには『禪波羅蜜次第法門』といい、「禪」によって佛教のあらゆる實踐法門を淺深の次第によって體系づけた書で、智顗の天臺山隱棲以前の代表的著作とされている。十卷という卷數の大きさの著作にしては經の引用は次の一例しか見當らないので、本書においては經が重視されているように思われる。引用を含んでいる部分は次のとおりである。

亦不從外來。而能覺知。故名爲觸。此八雖有十六。並約四大而發。因四大生。地中四者。重沈堅澁。水中四者。涼冷軟滑。火中四者。暖熱猗痒。風中四者。動掉輕浮。故金光明云。「地水二蛇。其性沈下。風火二蛇。性輕上昇」。

(大正藏第四六卷、五一〇c)

經の引用を含む右の一段は、卷の第五で四禪を明かすうちの初禪について、その初禪を發する相の釋中の、禪が發する因縁を明かす部分である。ここでは、掉・動などの八種の「觸」が實際には十六種あつて、それぞれ地水火風の四大によつて發生するということを説いているが、經の引用は、四大の有するそれぞれの性質の相違によつて、それぞれに應じた「觸」が生じることの説明の補強として用いられている。

經の文は、曇無讖譯の卷第一、「空品」第五から引いたものである。⁽⁷⁾經の文脈は、地水火風の四大を四蛇に譬え、四大それぞれに性質を述べたところであるから、自説の補強として引く文としては當を得たものであるといえよう。このような引用状況からうかがわれることは、智顗が經文を知悉し、必要に應じていつでも最も適當な部分を取り出すことができる状態にあったということである。次に『小止觀』の例を見よう。

(二) 『小止觀』に見える引用

『小止觀』は具さには『修習止觀坐禪法要』といい、そのほかに『童蒙止觀』や『坐禪止觀要門』など數種の呼稱がある。佐藤哲英博士の檢討の成果によれば、天臺山隱棲時代

に『次第禪門』の要文を抄出して、止觀の實修の入門書として智顗自身がまとめたものとされる。⁽⁸⁾

この書に見える經の引用はただ一例で、書の最末尾にある。引用の前後を含めた文言を挙げると次のようである。

行者當知。初中後果。皆不可思議。故新譯金光明經云。
「前際如來不可思議。中際如來種種莊嚴。後際如來常無破壞。皆約修止觀二心。以辨其果。」

(大正藏四六卷、四七三b)

右の一段は、最終章「證果」第十の末尾にある文で、止觀修習の果は初・中・後心のいずれの場合においても不可思議であるということ述べたものである。これに先立つ部分には、『華嚴經』『涅槃經』『法華經』が引かれて、初心と後心とにおける證果の相が説明されている。いまの『金光明經』の引文は、初・中・後の語に相應するものとして、前際・中際・後際の語があり、また不可思議の語がある一文を選んで引いたものであらう。引文の内容は、過現末の三時における如來身のあり方を述べたものであつて、この段の教證として内容的に完全に合致しているものとはいいがたい。

ところで、ここで引かれている經の文は新譯とあるように眞諦譯のものである。眞諦譯と曇無讖譯とを合糅した『合部

『金光明經』にはこの一文は見當らないので、經文についてこれを知る手がかりはないが、右の引用状況からして、眞諦譯についても十分知悉していたことがうかがわれる。

(二) 『摩訶止觀』に見える引用

『摩訶止觀』には本經の引用は十二例見られる。⁽⁹⁾ そのうち十例は曇無讖譯四卷本からの引用、二例は眞諦譯からの引用で、三身分別品、陀羅尼最淨地品から引かれている。眞諦譯からの二例は『合部金光明經』によって見ることができ、今、曇無讖譯からの引用を調べてみると、空品第五から二例、四天王品第六から一例、散脂鬼神品第十から二例、除病品第十五から三例、捨身品第十七から二例、と各章にわたっており、特定の章から集中的に引くことはない。このことから經を全體にわたって知悉していたことが知られる。以下、數例を擧げてその引用状況を見てみよう。

卷三下に、止觀の體・相を、敎相、眼智、境界、得失の四意から解釋するうちの、最後の得失について明かす段で、智と境の兩者の生じ方を、自生・他生・共生・無因生の四種のいずれの生じ方でもないとしてその實體性を否定し、それに續けて、

但有名字。名字無性。無性之字。是字不住。亦不住。是爲不可思議。故金光明云。「不可思議智境。不可思議智照」。卽此意也。

(大正藏四六卷、二九b)

という。智と境との實體性を破した後に、言葉のみが存在するといい、さらにその言葉も無性、すなわち無實體であるという。しかし無性という語は、その語の荷う意味は存在しても、その語の意義あるいは概念が實體化されてあるわけではないので、その點を不可思議というのだ、としている。ここでは一種の言語論が展開されているが、この段の本旨は、智と境とが本質的には無實體でありながら、なお現實には存している點を不可思議という、ということ、經の引文はこのことの敎證として引いたものである。ところが經の原文は、次のようになっている。

我現見不可思議智光。不可思議智炬。不可思議智行。不可思議智聚。不可思議智境。

(散脂鬼神品、大正藏十六卷、三四六c)

すなわち、引文では「不可思議智照」とあり、「智照」というが、經の原文にはその語はなく、引用の際に「智光」や「智炬」の語が經にあることから、それらを自由に改變した

ものと思われる。このような改変はこの例だけでなく、他の箇處の引用例にも見られるもので、天台の著作全般に見うけられる一般的特徴である。

次に四天王品からの引用例を示そう。卷第六上で從空入假の破法遍を明かすうち、入假の觀を、知病、識藥、授藥の三項によつて説明しているが、その第二の識藥の釋中で、世間の法樂について、『大品般若經』『大智度論』『涅槃經』などを引いた後に、次のようにいう。

光明云。「一切世間。所有善論。皆因此經」。若深識世法。卽是佛法。何以故。束於十善。卽是五戒。深知五常五行義。亦似五戒。

(大正藏四六卷、七七b)

この部分の意趣は、世間のあらゆる書もみな佛説にはかならないというもので、直前に引かれた『涅槃經』もその意を表わす文が挙げられている。右に引かれた『金光明經』の文もこの意に沿うような文が引かれてはいるが、先の例と同様、經の忠實な引用ではなく、やはり改變されたものである。經の原文は、「一切衆生及諸人王。世間出世間所作國事。所造世論。皆因此經」(大正藏十六卷、三四四a)というもので、引用というよりも取意に近いものとなっている。

天台智顗と『金光明經』(藤井)

次に、引用という形でなく、經名を示さずに取意として引いているものを二例挙げよう。その一つは、卷八上、正修止觀の大段第三、觀病患境の釋に、

第三觀病患境者。夫有身卽是病。「四蛇性異。水火相違」。

(大正藏四六卷、一〇六a)

とあるもので、カッコ部分は空品の經文の取意である。これは先に挙げた『次第禪門』における引用例と同一箇所の經文の取意である。

いま一例は、卷九上、正修止觀の大段第六、觀禪定境の釋中、八背捨を明かす段に見られる。それは、内有色外觀色を説明した後の次の部分である。

若發此相。深患其身。厭之如糞。何況妻子財寶。而生悵惜。「薩埵亡身」。鹿杖所害者。皆得斯觀。

(大正藏四六卷、一二二c)

右のカッコ部分の「薩埵亡身」とは、經の捨身品の取意で、薩埵王子が飢えた虎に我が身を投げ出したことを言ったものである。ここでは白骨觀を成就した例證として引かれている。

以上の舉例は曇無讖譯から引かれたものであるが、『摩訶止觀』には先述のように眞諦譯からの引用が二例見られる。

その二例を挙げると、まず第一は卷六下の破法遍の段で、横堅一心に止觀を明かす釋の中に次のようにある。

又「金光明。稱爲應身」。境智相應也。就境爲法身。就智爲報身。起用爲應身。以得法身故。常恒不變。廣大如法界。究竟如虛空。盡未來際也。

(大正藏四六卷、八五a)

右の文例の中で、「金光明稱爲應身」とあるが、應身の語が見えるのは新譯の三身分別品であるから、ここでいう『金光明』が眞諦譯を示していることが知られる。『合部金光明經』中に收められている眞諦譯三身分別品では、化身、應身、法身の三身が説かれ、化身と應身は假名有、法身は眞實有で前二身の根本であると説かれる。さらに法身は、法如如と如如智が不一不異の關係にあるものとされているから、いわゆる合眞開應の三身説となっている。この理智不二の三身説について境智相應といったもので、これを法報應の三身説の立場から、境について法身、智について報身、起用について應身、というように言いかえている。そして、その後には法身の常恒不變というが、文脈上からいって、この部分の引用はあまり意味がなく、舉例のための舉例としか思われない。

次の例は、卷八下、正修止觀の大段第五、觀業相境の釋中

に見られる。すなわち、

今修止觀。能動諸業。故善惡相現。疑者言。大乘平等。何相可論。今言不爾。祇由平等鏡淨故。諸業像現。光明云。「將證十地。相皆前現」。

(大正藏四六卷、一一一c)

とあつて、ここでは止觀を修した場合に善惡の相が現われるといい、その相が現われるということの教證として經を引いたものである。この引用部分は陀羅尼最淨地品から引かれたもので、原文では「菩薩十地。是相前現」(大正藏十六卷、三七四b)とあり、これを改變して引いたものである。

以上の二例によつても、經の眞諦譯を知悉しており、これを自在に改變して引用していることがうかがわれる。

(四) 『維摩經玄疏』に見える引用

『維摩經玄疏』中には、『金光明經』として引かれたり、援用されたりしている例は四例ある。以下、その四例を示そう。まず第一には、卷一の五重玄義の通釋について、六項によつて釋するうちの第六、對四悉檀の段で次のようにある。

如金光明經云。「五神通人。作神仙之論。諸梵天王。說出欲論。釋提桓因。種種善論」。亦是初番悉檀之方便也。

(大正藏三八卷、五二三a)

ここでは、四悉檀のうちの世界悉檀について、世の論や經書は法身の菩薩が人天の中に生まれて製したものだ、と述べた後にこの引用がある。その文脈からすると適切な引用であるといえる。經文は四天王品のもので、原文は「如諸梵天說出欲論。釋提桓因種種善論。五通之人神仙之論」(大正藏十六卷、三四三c)とあって、句の位置が冒頭と文末とが入れ替わっていて、正確な引用とはなっていない。

第二例は、卷二で三觀義を七項によって説明する中の第一、分別境智の釋中に次のように見られる。

此不思議境智。卽是此經(『維摩經』)所明不思議境智之正義也。故金光明經散脂鬼神品云。「我現見不思議智光。不可思議智境也」。

(大正藏三八卷、五二五b)

經の引用を含むこの一段では、境と智の兩者が不可得で實體がなく、しかも假有として存在している點が不可思議である、としており、その教證として經を引用している。これは先に挙げた『摩訶止觀』卷三下の例と全く同趣旨の内容で、それ故引いた經文も散脂鬼神品の同一箇處から引かれている。

ただ經文は『摩訶止觀』の場合では「不可思議智境。不可思議

天台智顗と『金光明經』(藤井)

智照」であったが、今の場合は右のとおりで、いく分經の原文に近くはなっているが、やはり改變して用いられている。

第三例は、卷三の四教分別の段で、別教に約して位を明かす釋中、諸經で位をさまざまに説いている一例として挙げられているものである。すなわち、

如華嚴經。三十心・十地・佛地・但有四十一位。(中略)新翻金光明・勝天王般若・及大品經。但明十地・佛地。不開三十心。

(大正藏三八卷、五三八c)

とあって、新譯である眞諦譯が『勝天王般若』などと同じく階位について十地と佛地のみを明かし、『華嚴經』のように三十心を明かしていないという。たしかに眞諦譯の三身分別品と陀羅尼最淨地品とは十地が説かれており、三十心は説かれてはいない。ここで本經の名が出されているのは、他の經典と同列に列挙しただけであって、引用の必然性はない。

最後の第四例は、卷四で、本迹について七項にわたって明かす段の第二項、「明本迹」中の釋の部分に見られる。すなわち、

四約體用明本迹者。卽是法身為體。應身為用。故金光明經

云。「佛眞法身。由如虛空。應物現形。如水中月」。正由虛空。有實月之本體。故有一切水月之影用。

(大正藏三八卷、五四五c)

とあつて、體と用の概念から本迹について説く部分に經が引かれている。ここで經のいう眞法身が本で、水中の月が迹とされているのは自明である。經の引用部分は四天王品から引いたもので、「由如虛空」の「由」が原文では「猶」⁽¹³⁾となっていることを除けば同文の引用である。

以上が『維摩經玄疏』に見られる全引用例であるが、四例を検討してみても經の説く語の重要な概念や、重要な思想を説いた部分が提示されているというわけではないので、『維摩經玄疏』における本經の重要度はさほど高いものではないといえるだろう。

さて、上來天台智顗の著作中に引かれる『金光明經』の引用例を『次第禪門』『小止觀』『摩訶止觀』『維摩經玄疏』の四書について検討してきた。その検討結果から次のことがいえよう。まず第一に、曇無讖譯ばかりでなく、眞諦譯についても、經文を知悉しており十分に通じているということである。このことが前提となつて、自説の補強のためや教證として必要な場合に自在に經文を選択し、自説に沿うよう經の文

句を改變したりして引いたものと考えられる。

第二に、四書を通じていえることであるが、引用の數自體は經を熟知している割には少ないということである。天台の著作中で引用の最も多いものは、『法華經』『涅槃經』『大般若經』『大智度論』『華嚴經』などである。そしてこれらの經論は智顗の教學思想上、重要な意味をもっている。一概に引用數の多寡によつてその經の重要度を測ることはできないが、いままで見てきた引用状況や内容からすると、智顗にとつて經の教理面における重要度は少ないということができるのではなからうか。

第三に、引用や援用が經の獨自の説を示しているものが少なく、またあつたとしてもその經の説によつて自説を構築しているということがない、という點である。たとえば、眞諦譯の三身分別品は經の佛身論が説かれ、また法身如來藏が説かれている章であるが、引用状況を見るかぎりでは經の佛身論について詳しい言及はなく、如來藏についての言及も見られなかった。このようなことから第二點とあいまって、智顗における經の教理面の受容度が低かつたということがうかがわれるのである。

四 『金光明經玄義』と『金光明經文句』の検討

『金光明經文句』六卷（以下『文句』と略）は經の隨文解釋で、『金光明經玄義』上下二卷（以下『玄義』と略）は、經の玄旨を五重玄の組織立てで述べたものである。この二書によって、智顗が經に對しどのような理解を示しているかということが知られるので、以下にこの二書について検討を加えたい。

『玄義』と『文句』の成立狀況や、その書誌學的検討についてはすでに佐藤哲英博士の論究があるので、今は觸れないが、二書の検討に先立って注意しておかなければならないのは、二書の成るにあたっては眞諦三藏の疏が常に意識されていたということである。眞諦は七卷本として經を譯出したばかりでなく、自身も疏六卷を製した。⁽¹⁵⁾眞諦の譯出は『歷代三寶紀』によれば承聖元年（五五二）というから、疏の成立はそれ以後のことと推測される。それはともかく、智顗の講説を筆録整理して疏の形にまとめあげた灌頂は、從來の諸師の疏とともに眞諦疏をつねに参照し、いわば種本として使用していたのではないか。『玄義』『文句』の二書に眞諦の説が舉

天台智顗と『金光明經』（藤井）

げられ、それを批判して後に自説を展開するというスタイルが多いのは、その一證左である。

さて、經に對する基本的な把え方として、經の分科についてみてみると、『文句』では次のようにいう。

此四卷文。總有十八品。舊來分割盈縮不同。江北諸師以初品爲序。壽量下訖捨身爲正。讚佛爲流通。正文又三。壽量下是正說。四王下大誓護經。除病下大悲接物。江南諸師以初品爲序。壽量下爲正。四王下十三品爲流通。眞諦三藏分新文二十二品。初品爲序。壽量下至捨身十九品爲正。後兩品爲流通。眞諦釋云。壽量明師果。懺・歎兩品明弟子因。授記是弟子果。除病是師因。四王下正論力用。前師果弟因既爲正。後師弟因果何得爲流通耶。（中略）今從如是我聞入壽量。訖天龍集信相菩薩室爲序段。從爾時四佛下。訖空品正說段。從四王品下。訖經流通段。

（大正藏三九卷、四六b・c、以下卷數を畧す。傍點筆者、以下同）

これによれば、從來の江北諸師は、序品を序分、壽量品第二から捨身品第十七までを正說分、讚佛品第十八を流通分として三段に分けており、正宗分をさらに三分している。それに對し、江南諸師は、序品を序分とすることは同じである

が、正説分を壽量品から空品第五までとし、四天王品第六以下すべてを流通分とするという。次に眞諦の分科を擧げて、二十二品のうち、序品を序分、壽量品から捨身品までの十九品を正宗分、残り二品を流通分とするという説を紹介する。そして、天台自身の分科は、序品から次の壽量品第二の後半、偈頌の始まる前あたりまでを序分とし、以下空品までを正説分、次の四天王品以下、最終章までを流通分とするという。これによってみると、天台の分科は江南諸師の分科に類似し、眞諦の分科は江北諸師のそれとは同じである。天台と眞諦の分科の大きな相違は、正説分の範圍の廣狹という點である。これは江北・江南兩諸師の相違ともなっているが、天台が壽量品の後半から空品までを經の正説部分としていることは、一經の趣旨がそれらの品々によって表明されているとみなしているわけで、經の内容把握の一性格を示している。正説分についてはさらに言及があり、壽量品の釋中で眞諦三藏の説も含めた三説を示し、眞諦説が壽量品を果段、三身分別品を因段としているのを「師云。三身成果上義。非因義」(五七b)として斥け、續けて第一の説として示した、常住の果を明かす壽量品を經の宗・體とし、懺悔品以下空品までを經の力用を明かすものとする説について、「初家所説

好。與今意同」(同前)としてこれを支持している。このことから天台は、正説分については壽量品を經の體、懺悔品以下空品までの三章を經の力用を明かすものとしており、天台が本經について壽量品をその眼目とみなしていることが知られるのである。

經の壽量品では、信相菩薩が釋尊の壽命八十年なることについて疑念を懷いた時に、東西南北の四方から四如來が現われ、信相に如來の壽量は齊限がなく、壽命無量であることを説き、信相はそれを信解して歡喜踊躍するということが説かれている。しかし、その壽命無量ということの根據は、過去無量百千億那由他阿僧祇劫における不殺生と施食の結果とあるだけで、ここには法身などの具體的な理論的根據となるものは説かれてはいない。それで、天台がこの壽量品における佛壽長遠を經の體とする時、その體についてはどのように解釋しているかを見てみよう。

『玄義』では、名・體・宗・用・教の五重玄の組織で經を解釋しているが、その五重玄の第二、辨體章では、釋名・引證・料簡の三項によって體について述べている。その第一項の釋名段で、次のようにいう。

體是質。質是主質。何爲主質之體。法身・法性是經體質。

若依義者。法身爲體質。若依文者。法性爲體質。法身・法性只是異名。更非兩體。(中畧)但是佛所游。入一切種智。以此爲根本。(中畧)故以法身・法性。爲此經正體之主質也。

(二〇c)

ここではこの經の本質は法身及び法性であるとしているのが知られる。義によれば法身、文によれば、法性が經の本質であるとし、法身と法性とは異なるものではないという。これによって明らかのように、智顗は壽量品で説かれている佛壽無量の根據として法身あるいは法性を据え、その永遠性によって壽命無量を理解しようとするのである。その自身の理解が偏見でないことを證するために次の引證段で經文を引いて教證としている。その教證として引いた例を挙げると、

序品云。「如來遊於無量甚深法性」。鬼神品云。「若入是經。卽入法性。如深法性」。二文旣云深法性。(中畧)法是軌則。性是不變。不變故常一。此常一法性。諸佛軌則。故云法性爲此經體也。

(二一a)

とあって、いずれも「法性に入る」という文を引いている。法身を引いた文がないのは、先に挙げた所で「文に依れ

天台智顗と『金光明經』(藤井)

ば法性」としているためであろうが、經の壽量品以外の場所では空品に「求於如來眞實法身」(大正藏十六卷、三四〇)とあって、法身の語自體は經中に説かれてはいる。しかし、曇無讖譯においては法身以外の語は説かれず、佛身についての論は展開されていない。今、天台は經の本質を法身・法性に求め、それによって佛壽無量を解釋しているが、それではその法身についてはどのように考えられているであらうか。

眞諦譯の三身分別品には、法身・化身・應身の三身が説かれ、それが合眞開應の三身説となっているということは先述のとおりだが、この佛身論が説かれる三身分別品が『玄義』の『文句』に引用あるいは援用されて、三身について論じられている。いま、それを見てみると、『玄義』卷上に、十種三法の一々について挙げた後に、三身を料簡する段で次のようにある。

若依眞諦師云。法身眞實。二身不眞實。此則三身體相各異。乃是別教中一途。非今所用。若言三身皆眞實。至理是法身。契理之智是報身。起用是應身。應身是實佛所化。皆實不虛。(中畧)應身例爾。非本體故爲虛。能利益故爲實。今取實邊。不取虛邊。故言三身皆實。是今所用。

(五a)

すなわち、まず眞諦の説として法身は眞實であるが、應身・化身は不眞實、すなわち假名有であるという説を出して、これを斥ける。眞諦説の場合は三身の本質とあり方がそれぞれ異っているので、これは別教中の一途にすぎず、今用いるところではないというのである。眞諦の説は經の三身分別品そのままの所説で、經には「前二種身。是假名有。是第三身（『法身』名爲眞有）」（大正藏十六卷、三六三a）とあつて、應身・化身の二身は法身によって根據づけられてあり、いわば法身の影であると説かれている。これに對し智顗は、法報應の三身説に立ち、三身がすべて實であると主張する。そのうち、本體でなく應化の身である應身が實であるのは、衆生利益の機能を有しているからで、この點を取り上げて實とするのだ、としている。經の佛身論は合眞開應の佛身論に立っているが、天台智顗の場合には、至理を法身、理にかなう智を報身、起用を應身としているから、法身は理佛、報身は智佛であり、開眞合應の三身説に立っているわけである。この立場は、十種三法を一々列擧して、その一々に常樂我淨の四德が具っていることをいう段で、三身の三法を示すところにもうかがうことができる。すなわち、同じく『玄義』卷上において、

云何三。云何身。法報應是爲三。三種法聚名身。所謂理法聚名法身。智法聚名報身。功德法聚名應身。

（二c）

とあつて、理法の聚りが法身、智法の聚りが報身、功德法の聚りが應身であるとしているのとおりである。このように、智顗が法身を理法そのものの理佛として理解する場合には、經の説く法身の内容とずれが生じることになる。經の説く法身は理智不二の法身であり、法身の中に眞如と、その眞如をさとする智とが不離の關係にある。一方、智顗のいう法身とは理としての眞如であつて、その中に智のはたらくは含まれていない。それ故に、先に擧げたところで、法身は法性とストリートにつながるわけである。

以上のことから、智顗がこの經の體、すなわち本質は法身、法性であるとする時、その場合の法身とは、常住不變の常住法身、眞如を意味していることが知られ、佛壽無量もその常住の法身を通して理解されていることがわかる。しかし、天台の佛身論の特徴は、三身の體相が各別であるのを別教と規定していたように、三身が各別でなく三身即一で、法報應の三身がそれぞれ圓滿に相即していると説く點である。『玄義』卷下には觀心釋が説かれているが、その三身につい

ての觀心釋中で、即空・即假・即中が三身であるとされ、即中を法身、即假を應身、即空を報身としているのはそのあらわれである（九a—b）。

次に『玄義』卷下に說かれる五重玄義の第三、明宗段によつて、一經の宗要について智顗の理解を検討してみよう。

今尋壽量品。雖施食不殺之因。乃將因擬果。果是正意。三身分別品雖復問因。佛答三身。還是果爲正意。今此意但用佛果爲宗。何者法性常。體甚深微妙。若欲顯之。非果不克。當知果是顯體之樞要。

（一一a）

ここでは、壽量品で明かされる佛壽無量のその因として明かされたものは施食と不殺生とであったが、それは因になぞらえて果を明かしたもので、この經の本旨は佛壽無量を實現している佛の果そのものにはかならないという。それは常住なる法性を根據とした果であつて、また常住法身を根據として顯現された佛果でもある。このように、經の體と宗とは相應しており、智顗が把握したこの經の本旨は、大乘『涅槃經』における佛身常住と重なるものがあるように思われる。

次に、教判中におけるこの經の位置づけを見よう。同じく『玄義』卷下、五重玄義の判教相の段には次のようにある。

天台智顗と『金光明經』（藤井）

すなわち、眞諦の、法華の後で涅槃の前の九十日の說法という説を擧げて、これを「是義不然」と斥け、『玄義』の末尾に自説を示して、

如此斟酌五味明義。則第三生酥攝、若四藏明義。則雜藏攝。四教明義。則通教攝。通教之中。即得論帶別明圓也。

（一二a）

という。これによつて明らかのように、涅槃の五味でいえば生酥にあたり、經・律・論・雜の四藏でいえば、諸大乘教の範疇たる雜藏に相當するという。また四教判でいえば通教にあたり、通教の中でも別教を帶びて圓教を明かすものと判釋している。このような經の位置づけを見ると、『法華』『華嚴』『涅槃』『大品』など、智顗が再々依用し、教學形成上も大きな影響を蒙っている諸經典にくらべて明らかにその重要度に差があると思わざるをえない。教學思想という點からみても、いままでの検討の結果から見ると、この經に據つて自身の思想形成をなしたというようなのは見られなかった。『玄義』と『文句』の二書のうち、この經について重要と思われるのは、『玄義』に說かれる十種三法論である。五重玄義の第一、釋名の大段で、經名の「金光明」の三字を釋するにあたり、この三字を十種三法を譬えるものとして、（一）

三德、(二)三寶、(三)三涅槃、(四)三身、(五)三大乘、(六)三菩提、(七)三般若、(八)三佛性、(九)三識、(十)三道、の以上十種の三法について一々を詳説し、いずれの三法にも常樂我淨の四徳が具備され、またその一々の三法がそれぞれ無二であつて、すべて「金光明」を譬えているとしている。十種三法は、『法華玄義』卷五下、三法妙を明かす段にも詳説されているが、本書における十種三法の方がより詳細で周到なものになっている。このことからすると、智顗は本經については、經の教理面から何ものかを受容しようとしたのではなく、逆に五重玄を用いて『玄義』を製することにより自己の教學を表明しようとしたのではないかとさえ考えられる。少くとも結果から見ると、經を素材とし、それを自己の教學によって解釋して、『玄義』という疏によって十種三法のような思想を整備した、ということになっているといえるであろう。

そのような意味あいからすると、智顗の本經に對する理解と受容の特色は、經の教理的側面にあるのではなく、むしろ經の説く實踐的側面にあるのではなからうか。次にこのような觀點から検討してみよう。

『文句』卷二の壽量品の隨文解釋において、佛壽長遠の二因縁として經が不殺生と施食とを説いているが、その不殺生

と施食とについて、『文句』は、「若備論者」(五五a)、あるいは「今當更説」(同前)といつて、止善と行善及び、五戒十善とについて詳細に説明を加えている。⁽¹⁹⁾これは智顗が經の力用を「滅惡生善」としていることと呼應するが、智顗がこの經の特色と存在意義とを、惡を滅し善を生ざしめるという點に見出し、そのことによつて戒について詳細な釋を加えたものと考えられる。この同じ傾向を示す例として、懺悔品第三の劈頭、懺悔について詳細な解釋を加えていることが挙げられる。本經にもとづいて金光明懺法が中國で廣く修され、天台自身にも『金光明懺法』一卷の著作がある。『國清百錄』卷一にその『金光明懺法』が收録されているが、その題號の下に割注に「直錄其事。觀慧別出餘文」(大正藏四六卷、七九六a)とあつて、「觀慧は別に餘文を出す」としている。この觀慧の文に相當するのが、今の『玄義』と『文句』であるから、この『金光明懺法』と『玄義』『文句』とは、智顗にとつて一具のものとして把えられていたことを意味している。

さらには、同じく『文句』の讚歎品の釋では、讚歎凡有四意。一從能讚人。二從生善。三從滅惡。四從所讚人。

(六四b)

とあって、この四意についてその一々を釋してゆくが、この四意のまとめとして、これらはすべて四悉檀の因縁によって品名を立てていると解釋し、その力用は生善にあると述べている。⁽²¹⁾同様に、やはり正論品第十一の冒頭においても四悉檀の⁽²²⁾一々について正論品という品名が關係づけられており、また續く善集品第十二においても善集品という品名が四悉檀によって立名されていることを述べている。⁽²³⁾このように四悉檀による解釋は、衆生に對する教化の側面をとりあげるという點から、經に對する實踐的理解を示しているものと考えられよう。

以上の『玄義』と『文句』に對する檢討結果からは、智顗のこの經に對する理解の特徴として、次のことがいえよう。すなわち、經の説く教理思想に對しては、すでに形成されている自己の教學によって解釋を施し、經を素材として、『玄義』中で自己の教學思想の完備をはかっていること。それ故、本經の教理思想から智顗が教學形成の上で何らかの影響を受けている痕跡が認められないこと。それ故、經の理解の特徴としては、經による懺法の修習、滅惡生善としての經の意義など、教理的側面よりもむしろ實踐的側面の理解に特徴

天台智顗と『金光明經』(藤井)

があると考えられることであらう。

五 小 結

これまで天台智顗が『金光明經』に對してどのような理解と把握を示し、經をどのように受容して自己の教學思想の形成に資してきたかという問題意識から、智顗の著作とされる『次第禪門』『小止觀』『摩訶止觀』『維摩經玄疏』の四書中に見える經の引用を檢討し、次に智顗の講説をまとめた『金光明經玄義』と『金光明經文句』とに當って、智顗の經の理解と受容について檢討を加えてきた。

經の引用狀況と引用形態からいえば、引用例は右の四書を通じてその數は決して多いとはいえなかった。しかし、その引用は經の各章から引かれており、またその引文にも自由に改變を加えたり、あるいは取意として引いており、經文を熟知して、自説の補強や教證を擧げるために自在に經を用いているという態度がうかがわれた。けれどもその引用によって智顗が新しい教學思想を提示したり、構築したということとは見られず、逆に自己のうちで既に出來上っている教學思想を説明するための例證として用いられているという傾向が見られた。この傾向は『玄義』『文句』の二書においても同

様であり、その一つの典型が十種三法の記述においてみられたところである。智顗の教判中における本經の位置づけは通敎の攝であり、一經の眼目を壽量品に置いて、その壽量品中で説かれる佛壽長遠の根據を法性・法身ととらえ、これを經の體として把握していた。經の眞諦譯では佛身論が説かれ、また如來藏の語も見えるのであるが、佛身論についても詳細な論及は見られず、經の如來藏説については見るべき言及は何らなされてはいない。一方、經の力用を滅惡生善ととらえ、四悉檀に關連づけての釋がなされたりしており、このような結果からすると、智顗における經の理解と受容の特質は、經の敎理思想にあるのではなくて、むしろ實踐面にあるのではないかと考えられる。『國清百錄』には、智顗の二度にわたる講説の記事や、經にもとづいた放生池の設置の記事が載せられ、また『金光明懺法』一卷が收録されている。智顗の著作に對するこれまでの検討結果と、右のような經の所説にもとづく實踐の事實をつきあわせると、やはり智顗にとって經の意味は實踐的側面においてより大きなものがあつたと考えられるのである。

註

- (1) たとえば、『新佛典解題事典』『金光明經』の項目參照(八九九頁。春秋社、一九六六年)。
 - (2) 佐藤哲英『天台大師の研究』、七三―七六頁(百華苑、一九六一年)。
 - (3) 同前書、七五頁。
 - (4) 同前書、同頁。
 - (5) 平井俊榮『法華文句の成立に關する研究』、春秋社、一九八五年。
 - (6) 拙論「天台と三論の交渉―智顗説・灌頂錄『金光明經文句』と吉藏撰『金光明經疏』との比較を通じて―」(『印度學佛敎學研究』第三七卷第二號、一九八九年三月)。
 - (7) 大正藏十六卷、三四〇b
 - (8) 佐藤前掲書、二六五頁。
 - (9) 引かれた經の品別に『摩訶止觀』中の箇處を示すと、次のようである。
 空品―大正藏四六卷(以下卷數略)、一〇六a、一一〇b
 四天王品―七七b
 散脂鬼神品―二九b、八七b
 除病品―一一〇c(二例あり)、一二一a
 捨身品―五九c、一二二c
- 以上は疊無識譯で、次に眞諦譯として、次の二例がある。
 三身分別品―八五a

陀羅尼最淨地品——一一c

- (10) 「惟有如如・如如智。是名法身。前二種身。是假名有。是第三身。名爲眞有」とある。大正藏十六卷、三六三a。

- (11) 「善男子。離無分別智。更無勝智。離法如如。無勝境界。是法如如・如如智。是二種如如・如如。不一不異。」とある。大正藏十六卷、三六三c。

- (12) 三身分別品——大正藏十六卷、三六四b

- (13) 陀羅最淨地品——同卷、三七四a—b

- (14) 大正藏十六卷、三四四b

- (15) 佐藤前掲書、四四八—四七四頁。

- (16) 『歷代三寶紀』の記述では「金光明疏十三卷太清五年出」(大正藏四九卷、九九a)とあって、十三卷というが、義天の『新編諸宗教藏總錄』卷一では、『金光明經』について、「疏六卷眞諦述」とあり(大正藏五五卷、一一七〇a)、十三卷という数は經の七卷を合した數と推測されている(鎌田茂雄『中國佛教史』第四卷、四三頁。東大出版會)。

- (17) 鎌田茂雄博士は、より具體的に、承聖元年(五五二)から揚州の正觀寺で譯し始め、承聖二年二月二十五日から建康、長凡里の楊雄の別闍道場で譯業を續け、三月二十日に完了したのであらうとされている(鎌田同前書、同頁)。

- (18) 經の分科については、すでに別な所で觸れているが、先の場合と論述の目的が異なるので再説する(藤井前掲論文一一〇頁)。

天台智顗と『金光明經』(藤井)

- (18) 大正藏三三卷、七四四a。

- (19) 大正藏三九卷、五五a—b。

- (20) 『玄義』卷下、五重玄の第四、用を明かす、の段で、「滅惡生善爲經力用。滅惡故言力。生善故言用」(一一b)と述べている。

- (21) 結此四義。都是四悉檀因緣立此品名。故言讚歎品也。此品雖從四悉檀立名。正是生善之用。(大正藏三九卷、六五a)。

- (22) 大正藏三九卷、七八b。

- (23) 同前書、七九b。